



Title	人権教育におけるセルフ・エスティームと内的葛藤の考察～「開放性」試論
Author(s)	野崎, 志帆
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/44167">https://hdl.handle.net/11094/44167</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	野 崎 志 帆
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学 位 記 番 号	第 1 7 4 8 8 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 15 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科教育学専攻
学 位 論 文 名	人権教育におけるセルフ・エスティームと内的葛藤の考察～「開放性」 試論
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 平 沢 安 政  (副査) 教 授 友 田 泰 正    助教授 西 澤 哲

### 論 文 内 容 の 要 旨

「他者を尊重するためには、まず自分自身を尊重できないといけない」という「セルフ・エスティーム (self-esteem)」(以下、「SE」と表記) の概念は、人権教育を個人の資質のレベルでとらえ直すうえで重要な意義をもってきたものの、抽象的な目標概念以上のものとして教育理論の中に位置づいてきたとは言い難い。むしろ、心理学研究における SE 理論を概観した時、SE それ自体を「望ましい特性」とみなし、あたかも SE が「高ければ高いほどいい」という認識で抽象的、スローガン的にとらえるような傾向が見うけられるが、このことは、人権教育にとって必ずしも適切とは言えない。

本論文は、改めて抑圧・被抑圧という立場性もふくめ、いずれの立場にある者であろうと非対称的な関係性をもつ暴力性に抗していくための資質を育成する教育として人権教育を定義づけ、他者との関係性をプラスにもマイナスにも規定しうる重要な要因としての SE の特徴を踏まえたうえで、筆者が「開放性」としてとらえる資質の構造と発展過程を示すことにより、人権教育の新たな理論的枠組みを提起するものである。

本論文で筆者は、心理学研究における SE 理論を概観したうえで、人権教育における SE 概念の受容過程とそこに生じた課題を整理し、そこから日本の国際理解教育が、「差異」に依拠しながらも「非対称性」への視点を抜きにしたところで SE の重要性を語ってきた面があったのではないかと、という問題意識から批判的に考察している。そして国際理解教育を人権教育として構想し、そこで育てるべき「資質」を検討する際に、他者との非対称的な関係性を固定化させないという観点から、①可塑的自己観、②葛藤を引き受けられる自己のあり方、③「対話」と非対称性への視点の三点が重要な柱となることを指摘している。さらに、「非対称性」に抵抗するための教育として位置づいてきた同和教育における SE や内的葛藤についての議論について考察し、そこから内的葛藤を通じて形成される、「対話」の回路が恒常的に開かれている（または開くことができる）資質としての「開放性」の理論モデルを提示している。そして最後に、その発展過程を同和教育における「人間関係づくり」を軸にした実践の分析を通して整理している。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、日本の人権教育において注目されているセルフ・エスティーム概念（SE）を批判的に考察することにより、人権教育によって育てるべきとされる3つの資質（知識、スキル、態度）のうち、とくに態度の形成に焦点をあてた人権教育のモデルを、「開放性」概念を軸に提案するものである。

心理学研究における分析的概念であるSEが、近年、人権教育や生きる力を育む教育の文脈において目標概念として注目されるようになり、日本の教育界には、SEを一面的に肯定的なものとしてとらえるような傾向が広がっている。申請者は、部落差別の克服をめざして蓄積されてきた同和教育の理論と実践に照らしてSEを批判的にとらえ直すことにより、このような一面性を克服する方途を提案しようとしている。

申請者は本論文において、心理学研究におけるSEをめぐる議論を人権教育の全般的な問題意識から検証するとともに、国際的な人権教育や国際理解教育の動向、さらには昨今の個性化教育の動向まで視野におさめながら、それらの中でのSEの言説を丹念に分析している。さらに同和教育に独特の言説や概念を、SEを軸にして読み解くことにより、普遍性のある言説や概念として再定義する試みも行っている。また、「開放性」の形成プロセスについて、内的葛藤の概念を軸にししながら、**vulnerability**（受苦可能性）、**resiliency**（しなやかさ）、受容と共感、対話といった諸概念と組み合わせて描き出すことにより、オリジナリティのあるモデルを構想している。

「開放性」概念の妥当性や人権教育への具体的な示唆に関する課題は若干残るが、さまざまな人権教育の研究者や実践者にとって、本論文は今後、共通の検証軸として有効に活用しうる斬新な議論を提示している。以上の理由から、本論文は博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判定する。